AALA ニューズ１０１号 ウクライナ特集号の内容紹介

前号に続いてウクライナ特集号となります。ウクライナの事態は、ロシアが武力によりウクライナに侵攻し、制圧を図っていることが核心的事実です。また攻撃の過程で、ロシアが核兵器のボタンに手を伸ばそうとしていることも極めて危険です。ウクライナの人々に心寄せ、一刻も早い「平和と安全の確保」をもとめて行きましょう
しかし一方で、欧米諸国がロシアを締めあげ、NATO などの軍事同盟を世界支配の道具にしようとしていることにも注意しなければなりません。
いまこそ「核も軍事同盟もない平和な世界」を目指す AALA の出番だろうと思います。大いに学び、大いに拡げて行こうではありませんか。

1. ICAN ロシアの核脅迫についての共同声明

2017 年にノーベル平和賞を受賞した国際反核組織「ICAN」が 5 日に発表したアピールです。ロシアの反体制派ジャーナリストで、昨年のノーベル賞受賞者 D.ムラトフとの共同声明となっています。

２． キューバ国連大使「国連総会ウクライナ緊急特別会合での演説」

キューバ大使館の仮訳によるものです。

以下の４本は、アメリカがこの事態の隠れた主役であることを明らかにした記事です。

３． 遠藤誉「バイデンに使い捨てられたウクライナの悲痛」

遠藤さんは中国問題グローバル研究所のスタッフ。大統領選挙の間バイデンのウクライナ疑惑がトランプに散々利用されたが、それと今回の事態の間に関係があるというのが遠藤さんの主張です。

「吐き気がするほど不快だが、面白い」　というのが好きな人はご一読を。ただしこれだけ読んでわかった気になるのは危険。

４．遠藤誉「バイデンのメリット」

４．の続き。バイデンと米国にはこれだけのメリットが有ると、列挙されている。
３．でベローが「南の国は米国を持ち上げるようなキャンペーンに参加したくないので躊躇している」と書いているが、これを読むとその気分がよく分かる。

５．　名越健郎「バイデン父子がウクライナから破格報酬」

ここまで読むと、流石に「アメリカとロシア。どっちもどっち」という感じがしてきます。

それとともにアメリカの一極支配体制が続く限り、まちがいなく「第２、第３のウクライナは発生する」とかくします。

６．ウクライナ侵攻に思う_会員からのメール

北海道 AALA のウクライナ声明に呼応して会員の影山さんから寄せられたメッセージを紹介します。
同じようなご意見があれば、AALA ニューズに掲載したいと思います。編集部あてにメールお寄せください。

７．トレニン「ウクライナにおけるプーチンの真の狙い」

ちょっと古いのですが、昨年末の「フォーリン・アフェアーズ」に掲載された記事で、副題には「もとめているのは NATO の拡大阻止で、領土の拡張ではない」というものです。
いまの状況を考える上で、一つの原点としての意味を確認すべきかと思い、いまさらではありますが掲載します。

８．アンジェラ・ステント「プーチン・ドクトリン」

こちらは８．とは逆に、ウクライナへの武力侵攻がプーチンの領土拡張の狙いに沿ったものであったという主張です。著者はプーチンが「世界の取締役会」への復帰を狙っていると考えています。
同じ「フォーリン・アフェアーズ」の論文であり、怪しい素性のものではないのですが…

９．おまけ

集会等で使用する場合に役立つよう、印刷用の記事を載せておきます。
最初に日本 AALA の声明を載せています。何度も議論を重ねて作成したものです。
ウクライナの政府は「維新」みたいな人が握っていますが、それと闘っている人たちもいます。貴重な情報なので使ってください。
もう一つは「世界反核医師の会」の前会長の発言です。わかりやすく書かれているのでご利用ください。